



資料紹介 ある家族のアジア太平洋戦争下・京都の日々

長, 志珠絵

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 60:69-100

(Issue Date)

2023-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100485330>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100485330>



資料紹介 ある家族のアジア太平洋戦争下 ・ 京都の日々

長 志珠絵

1. はじめに

20世紀日本では、広い階層で日記をつける習慣が存在した¹。そうした「日記文化」は個人のエゴ・ドキュメントであるとともに個々が置かれた背後の社会の変化を細部から照し出す。日中戦争からアジア太平洋戦争下では、兵士の従軍日記にも注目があつまるが、特に総力戦下の都市住民が綴る日記は、「銃後」とされた日々の暮らしを戦災下の「空襲・戦災日記」記録へとかえる点で特徴を持つ²。戦時下での人びとは日々の非日常への気づきと同時に非日常のなかの暮らしと意思を日記に記した。しかし、知識人や役務を持つ成人男性、中等教育の男女学生による空襲日記が多く言及されるのに対し、戦争末期の壮年女性や高齢者女性、いわば「銃後」の「主婦」層による日々の記録はまれである。

以下で紹介するのは、京都市内に残された、主婦の回想記である『八重年代記』（以下Aと略す、元は原稿の束）、とその夫「塩尻清市」³による『時事評論』（原本は日記帳、事後の書き込みあり、1937.9.16～1985.9.29、以下Bと略す）、八重の実母せつによる『せつばあちゃんの手記』（原本は日記帳か、1944年1月1日～1945年6月30日、以下Cと略す）であり、これらは日記の形式を持つ記録および日付を伴う手記の束であり、成人した同居家族3人による。

Bの『時事評論』は日記としては間欠泉的であるが、1941年（1/25～3/4）、1944年（3/6～4/11）をはじめ、1944年以降1954年12月26日に至る記述を詳細に持つ。また1940年6月25日からとんで7月、「日記をつけぬ間に様々の事件あり。フランスの対独降伏、日本の親独方針急進、米内内閣倒れ近衛内閣成立。」（1940.7/25）など時勢をまとめて記録する他、事後の解説的な書き込みも加わるが、書き手によって自覚的に書き分けされている。Aは疎開先から家族が再結集した後の1951-2年に手記としてまとめられたと思われる。あまり

時を経ていない段階から回顧した、戦時下の回想記録を含む19世紀以降の一族と家、自身と家族の記録である。日々の短い記述からなるC日記は後年、娘であるAの書き手によって編集された可能性が高い。1945年6月以降の日記も存在したと思われるが、残念ながら不明である。Bは公的立場を持つ知識人の日記であり、情勢分析も多いが、職場や市井の動静に強い関心を抱き、家族の会話の様子に詳しい点も貴重である。特に回想記としてのAや高齢女性の日記であるCと日記として長いタイムスパンを持つBについて、家族3人の書き手の記述が重複する1944-1945年を中心に、戦時下京都および疎開について、生活記録として紹介したい。

2. アジア太平洋戦争へ

京都府舞鶴市を親族も含めた生活拠点としていた一家は1936年4月、京都市郊外の大將軍西町に借屋住まいとなった。京都市内への移住時で八重24歳、夫・清市37歳、長女4歳、八重の母せつ68歳、前妻の長男15歳・次男12歳である。苦学し、すでに大学に昇格していた一橋や京都帝国大学英文学科に学びながらも教育資格としては検定資格によらざるを得なかった清市が、1925年27才から11年間つとめた舞鶴中学校から京都府立第三中学校へと異動、着任したことによる⁴。八重は家計簿をつけていたのだろう、1936年度の「臨時出費」として、引越し480円に加え、米1升20円、衣料120円、貯金引き出し600円をあげた（A-56頁）。1936年度での京都市周辺部での生活支出は、家賃電気30円・ガス水8円と借家としての経費が38円、この時期は育ち盛りの男児2名を含む子どもと大人の多い暮らしであり、食費50円は全収入の三分の一を占める。子どもと高齢者がいる家でもあり、交際費20円、教育・医療5円、知識人家庭の新聞娯楽3円は必須だろう。清市の小遣い3円とある。月掛貯金13円に税金3円。生活にゆとりはない。Aは移住当初、「家賃月27円（月給の4分の1、月給130円）」（A55頁）の暮らしを以下のように記している。

「京都へ来て一番有難かったのはガスと水道がある事だった。これまでと比べたら女手一人分の手間が省けた。その頃は着る物は夏は女も殆ど簡単服で、講義

録で覚えた洋裁のイロハが役に立った。冬は毛糸の手編み、デパートでよい端切れを見つけるのが何よりの楽しみ。オーバーもシャツもなく、冬の風が突き刺さった。粉雪のちらつく中を下立売の御旅市場へ買物に行き、大鯛の開き一枚位が晩のメインディッシュであった。朝はご飯を炊き、じゃがいもの味噌汁。パン食は高くつく。翌年佳子が幼稚園へ上がると弁当4つである」(A-56 頁)。

統制経済がはじまる 1938 年以前での「主婦」のくらしとささやかな楽しみが、ローカルな情報をちりばめながら回想されている。高等女学校出の八重は、講義録を取説として裁縫を習得できる器用さを家族の暮らしに役立てている。使途に明記のない「10 円」の記載があるのだが、被服費だったのだろうか⁵。「御旅市場」は米騒動以降、大都市圏に設置された公設市場の一つであろう。京都市では第一次大戦から昭和初期、郊外の市域編入に重ねて計画的に整備され拡大した⁶。移住者としての八重とその一家はまさに日中戦争以前、郊外に市域を広げる大都市京都での俸給者生活を送っていたことになる。

借家の家賃は高い。一家はその後、知人の紹介と強いすすめもあって、「せつの老後用にとってあった 1000 円も全部つぎこんで」「月掛け貯金」も加え、1938 年、宅地開発途上の花園に家を新築、さらに郊外に引っ越した (A-58 頁)。地所は森田牧場跡であり、戦時下に掘り返すとコンクリートの土台が出てきた。この間、次女が誕生、兄たちは家を離れた。京都府立三中勤務の B 日記は、時局への批判と諦念・期待を交えつつ、俸給者の窮乏をリアルに綴る。B 日記の長い引用になるが、書き手の市井への視線や時局批判をめぐる哲学が読み取れる記述でもある。

「最近新聞に、空襲されるようになったら 14 才以下 60 才以上は大都市から田舎へ避難させるという計画が発表された。日米戦に対する措置だろう。佳子が今日学校で友達から聞いてきて話すので、新聞記事の話をすると老母は泣き出す、佳子は「ケッチな人」と平気である—こんな事があったと、妻の話。私が帰宅すると、老母がそんな馬鹿なことは止めたらよいと言う。仕方がない。どうせ日米は戦う、馬鹿な事だが、結局その馬鹿なことをすることになるのだと

説明する。・・・夜間中学を九時半に終わって帰る。途中の暗さ。以前は今時分あかあかと街路を照らしていた店々の燈も消えて戸締まりがしてある。/ 何もかも、誰も彼も戦争気構え。日米戦を考えている。どうも我々の耳に入る—どこからともなく耳に入ってくる話では、支那事変はうまく行っていない。(B—1941.1/27)

「今日隣組内へ2月から7月まで半年分の家庭用砂糖・マッチ購入券を配る。これは確か昨年7月頃から配給制になった筈。マッチ—家族6人以下並型1包(1ヶ月分)；砂糖—1人1ヶ月0.6斤。用事、病人には特配。現在配給制の品はほかに木炭(昨年11月より配給制)。私の家では5人で12月に2俵、1月も2俵もらった。大体これでやって行ける。・・・教員の生活難。高師出のK教諭(32才、扶養家族五人)が本俸105円、加俸5円、夜間中学兼務で週2時間で月10円。合計月120円、その中から愛国貯金・献金・国庫納入金・等々を引かれて手取り110円位、やって行けぬから家庭で教授。方向転換でもしたくなると言っている。現在三中校長約200円、教頭150円、私140、この辺は加俸16円、その中から10-15円毎月引き去られる」(B—1941.1/30)

「家庭で教授」とは家庭教師だろう。清市も1/27の記述を見ると夜間中学兼務を行っている。暮らしを支えるための多忙である。

1939年から導入された生活物資の配給制について、上記の引用と同じく()内は、書き手による。Aの記述を参照しておこう。

「始めのうちは、一般人は大人一日二合三勺、軽労働者三号二勺、重労働者・農作業者は四合六勺であったが、一般への配給はだんだん米の率が下がり、代替品(メリケン粉、こうりゃんかす、外米、大豆等)が増え、調味料も割当て、塩は岩塩を砕いたものらしく砂利のようであった。生活物資(ちり紙、石鹼、酒、煙草)も皆配給、衣料品は衣料切符。配給の玄米を一升瓶に入れて木の棒で搗いて精白する人や、私の家では、石臼で挽いて粉にし、薩摩芋を炊いた所へ多

量の水で溶いて流し入れ、ドロドロ状にして常用した。あついうちはとても美味しかった。店屋は殆ど休業状態、飲食店は米の配給があった時だけ、うすい粥を作って売り出すと直ぐ行列が出来た。たまに町内からお粥券が当たると、指定の嵯峨のうどん屋まで恭子をおんぶして雪の日に行った事もあった。どこそで鶏肉50匁売るそうだとか、卵3個ずつ買えるそうだとか、ハンカチ3枚、タオル2枚等、聞く度に何をおいても行列に走って行った・・・」（A-60頁）。

俸給者の清市の生活物資への言及に比べ、主婦である八重にとって関心の中心は米にある。彼女の叙述は細部の説明がイメージしやすく明晰である。「ドロドロ」や「粥」をもらいに行く記述はCの日記にも頻出する。一方、世界情勢や日本の置かれた位置にも懐疑的で自省的でもある清市の記述だが、学校を通じての具体性を備え、世相の変化の記述を意識的に切り取ってみせる。

「午前七時平野神社参拝。全校。興亜奉公日定例行事。・・・神社参拝、特に早朝参拝等は、多忙な身に苦痛だ。苦痛は別としても、三中職員の中で心からそうしたい、せねばならぬと思って参拝する者が一人でもあるだろうか。勿論神社に敬意を払ったり、前を通る時礼をしたり、すなおな心でする人も少しはあるだろう。しかし早起きまでして参拝をしたい人は恐らく余りあるまい。形だけの礼拝—かくて儀礼的偽善国民になるのだ。すべてが芝居がかって来て困る。礼拝の仕方まで、二拝二拍手等とやかましく言うものがある。国家で様式を統一するという話まで出ている。そう言えば、最近新聞を見ていると、今日全国的に行われている黙祷—震災記念日・出征将士武運長久・戦没将士英霊に感謝、等々の「黙祷」は、西洋の様式だからいけない、之を廃して純日本式の古儀にのっとるべし、という様なことを言う人がある。・・・飛行機や軍艦は西洋から来たものだから使うな、と主張しないのが不思議である。・・・」（B—1941.2/1）

「・・・披露宴伊勢長。嫁の衣装は時局下禁令で質素。披露も最初に飯を出す。飯の時間が五時半から八時と決められている為だろう。料理も以前より質素、散会も九時と、これ等の事は極めて嚴重に守られる。ただ一つ驚いたのは平安

神宮である。・・・結婚式用らしい建物や控え室の建物等、とても立派なものが新築されている。・・・時局で、神社だけは治外法権みたいなものである。集まっている人々が色々なことを言う：「これはここの商売用の建物じゃないか。神社というものはうまいもんだ」「何しろ事変で一番金を儲けたのは神社だからねえ」「世間は苦しんでいるのに、神様の名前でやれば何でもやれるもんだな」「いつその事披露宴もここでやれるように、料理屋も兼業したらどうだ」などと笑う者もある。これは内務省提案の新法で罰せられる不敬罪だろうか？ともかく20分ほどの式で安くて20-30円も取るのだから商売には違いない。・・・お宮さんはうまいもんだと言うのも、まんざら只の冗談ではない。/ 電車内の女学生と卒業生らしい娘の立ち話。「先日職業紹介所の人に来て、働いているとか、何故勤めないとか、色んなことを尋ねた。弱ったえ。どうせそのうち徴用されるんなら、今のうち好きな所へ勤めた方がええとも思うしなァ」（B-1941.2/2）

B 日記は全般に、市井の会話を多く採取している。興味深い記録である。一方書き手は、地域社会での貢献も求められるが、どうやら新興の住宅地でもある郊外の地域住民の結束はおぼつかない。

「第三回心身鍛練週間事業要項が町内会联合会から通知されて来た。曰く、午前五時よりラヂオ体操の会、曰く耐寒遠足会、曰く神社参拝マラソン大会、曰く平安神宮奉納建国体操大会。私は隣組長だから、隣組員に勧誘してくれという訳だが、例に倣ってばかばかしくて勧誘などできない。疲労と時間つぶし以外の何者でもない。官僚も民間指導者もこんなことばかり計画して力んでいる。彼等も内心は反対なのだろうけれど。/ ともかく役目柄伝達はしたが、参加者皆無。当たり前だ！」（B-1941.2/3）

「Y という善良な先生がある。「国体の本義」輪講会の度に必ず「一寸ひと言」と言って立ち上がって、熱弁を振るう。本気らしいけれども実にくだらぬ熱弁を振るう。一分間でも早く済んでほしいと思っている皆の者が甚だ複雑な仮面を被って傾聴する」（B—1941.2/5）

「・・・職員室の寒さ。スチームを通していているというのだが、パイプを握って目をつぶって全身の神経を集めて、やっと、ほのかな温かみを感じる程度。小さな鉄火鉢が一つ出ているだけ。・・・近頃鮮魚払底。芋もない。うどん玉も買えない。うどん屋も玉が配給だから玉だけは売らぬ。素うどん八銭。食料の不安を感じる」（B-1941.2/13）

「米国は戦争する決意で万事やっているように見える。日本のことは却って我々に解らない。とにかく不可避だ。近く要避難者調査が始まるが日本の防空施設は民間では皆無だ。近頃あちこちの町内会で防空壕の計画をしている由、だが、そんな小規模なものでは駄目だ。やるなら公費で大規模なものを造営しなければならぬ。立命では学制改革をして英仏語を廃する由。それもよからう。しかし大体あそこは偽善的な新しがり屋で、・・・禁衛隊などを組織したりして愛国ぶっているが、くだらぬ学校也。雨が降ると足許に注意して歩く。靴に浸水するのだ。洋装の若い婦人、上は立派だが踵の低いべた靴だから靴下の破れがチラチラ出る。非常時日本は足許に見える。」（B-1941.2/21）

「非常時日本は足許に見える」と名付けたB日記の書き手は、教育機関の時局迎合的な動きに手厳しい。ましてや多くの私立中等高等教育機関のなかで率先して「英仏語を廃する」学校に対し、英語教員としては、当然の感慨だろう。

「配給 3月1日から従来の米屋との関係が絶たれて新たに出来た配給所から一定の配給を受けることになった。私の家は今まで伏見の米屋で大変親切にしてくれていたが、今度は此方の配給所で何となく心細い。昨日第一回の配給米10日分一斗三升持って来てくれたが、その米を見て皆驚いた。外米と屑米のような内地米の混合物」（B-1941.3/4）

Bの1941年の記述は、3月4日以降、「我が軍仏印増派。英米わが資産凍結。6週間前から独ソ戦。総辞職、松岡外相退陣」（7/29）、「21日まで防空演習。学生生徒補助隊も出勤。皆真剣。此間東条内閣成立。戦争必至。」（10/12）といっ

たように簡略だ。2月3月での記述の間隔が短くなるのは学校教員にありがちなのではないだろうか。いずれにせよ日々の多忙さがわかる。その2ヶ月後、12月の日記Bの記述は以下の2件であるが、開戦直後の記述は興味深い。

「長い間の多忙だった。八日遂に対米英宣戦布告。私の家はラヂオがだめだから知ったのは二時間目の授業時間だったかと思う。今思い出すのは皆が案外明るい顔をしていたことである。私自身も急に重荷のおりたような、落ち着いた気持ちだった。深く落ち着いた気持ちだった。勿論空襲の危険も今後の苦しい生活も十分頭に浮かんでいた。しかもそういう危険が全く日常茶飯事的なものに感じられた。これは我ながら多少意外だった。日本にとってはもうここまで来れば生死の問題と皆が思っている時だった。米英は日本を圧殺せんとしている。長い間の暗い重圧が一瞬にして払いのけられたような、息詰まるような重圧に対して捨て身でぶつかるような、精神の統一された覚悟の気持ちだった。その後国民は非常に落ち着いている。覚悟を定めた落ち着きである。その後発表された戦果にも空騒ぎをしない。国民は海軍に絶大の希望をかけている」(B—1941.12/21)

「勤労作業付き添い。支那事変中はどうしても本気で戦争に協力する気にならなかった。どうもすべてが氣にくわなかった。しかし今や文句なしに生死の分かれ目に來た。今や弱者でなく強者一過去長い間に武力を以て金力を以て世界を征服し、その特権を維持せんとする強者特権者を相手に戦っている。もう是非善悪にかかわらず戦うより途はない。私も心から戦勝を一祈る。勝てるかどうかは分からないが、負けてつぶされてはならない。絶対絶命の立場にいいよ立った。…」(B—1941.12/30)

日中戦争の開戦と対米戦争の開戦をめぐって社会の受け止め方には落差があった—こうしたよく知られた指摘が、「英語教師」である清市の自負においても確認できる。

3. アジア太平洋戦争下の都市・京都で暮らす日々

2つの日記にもAの回想記にも具体的な経緯について記述はないが、1942年度を迎え清市は府立三中を辞し、光華高等女学校勤務の日々である。1942年の記述は3件（3/1、7/24「学校報国隊訓練」、8/26）、世相は荒れつつある。

花園市場に百人以上列を作っていた。皆切符を持っていた。卵の配給である。配給では米が不足。御室国民学校では毎日20余人も弁当の中味を盗まれる由。大將軍学校にもその例あり。（B—1942.3/1）

大將軍国民学校は引っ越し後も長女が通った学校であった。1942年での最も長文は以下であるが、英語教育への処遇は清市が光華女学校に移った理由の一つと推察される。

「三年生の英語学習希望者39名。これは文部省や府の言うことをそのまま主事から申し伝えて、何の工作もせず勧めもせずに申し出させた人数である。大部分漫然と上級学校希望の為という理由だった。然るに、これを府知事に申請して承認を得るには漫然と上級学校志望では困る。何校何科志望と詳しく書いた上に、一々志望の理由を上申せよという府学務課の注文である。意地の悪い注文だ。そんな詳しいことがまだ三年生の彼女達に書けるものではない。漫然としているのが当然だ。まるで英語を学ぶことが悪い事であるかの如き取り扱いではないか。しかもこれは課外の学習で正規時間内の授業でもない。課外ではこんな申請や届出すらせずに色んな事をする。英語のみこんなに厳しく「取り締まる」のは何故か。ばかな話だ。そんなにやらせたくないのなら何故堂々とあらゆる学校の英語を禁止しないのだ。どうせ英語を「敵性語」と呼んで居るではないか。お話にならぬ。不快を極む。」（B—1942.8/24）

1943年も日付が明確であるのはBの清市日記のみだが、物資窮乏は加速する。「タバコが買いにくく」（B—1943.1/16）のうえ「飲食店は皆「本日売切申候」の札をかけている。」（B—1943.1/28）有様のうえ、家も寒い。「帰ってみると

火鉢に火もない。炭の不足だ。こたつに入る。夕食は野菜混飯を二碗、朝粥のほかに飯を食べたからそれだけ少なくするのだ。・・・食料不足が何と言っても気分にくたえる。子供等を見ていて暗い気持ちになる。」（B-1943.2/2）、ついには「近頃は家でものを食べるのが心苦しくなった。私が食べたならそれだけ皆が困る」（B-1943.2/3）との記述はAの回想記と重なる。

3つの日記及び回想記の記述が重複する1944—1945年はまさに戦局の悪化が身边に及ぶ時期だ。Cのせつの正月の記述は「お鏡開きをした。又今年も元気でさしてもろてかんしゃする」（C-1944.1/4）とあるが、清市日記の1943年の記述は3月6日から始まる一方、実家である島根の農村と都市部との生活の落差の指摘がある。

「正月前後二週間高見では戦争を忘れて過ごしたが、ここでは四六時中戦争を忘れることはない。食物の不自由、燃料不足、着る物、はく物、あらゆる物に戦争を思う。米軍は小笠原島辺りまで来たらしい。東京は相当殺気立っているらしい。ぼんやりしていれば負ける。リーダーシップが無い」（B-1943.3/6）

日々の食料にことくなか、Bの記述も変化する。戦争は旧制中学校の生徒たちを確実にまきこんでいく。

「小針氏にきくと三中の海軍飛行練習生が46名割当てられたという。生徒達は色々勧められて志望する。私の知っている五年生のある組では級長も副級長も志望したという。明白に死に赴くのである。心を打れる。」（B-1943.7/11）

「戦争は凡てを変化させる。我々は、少なくとも私が今日まで吸うて育った空気というか、その空気の中に育って来た者は、デカダンは別として、一般に、正義、自由・平等・平和・愛等々の理念を掲げて来た。しかも正義とは、我ひと共に平等の地位に置いて、我に執せず彼を排せざる人類的正義であった。自由も平等もそうであった。愛とか平和とかは自国中心のものではなかった。すべてが、自らの民族を中心としたものではなかった。国家意識の殆ど無い理念であった。

戦争はこれを凡て変化させる。多くの人々はそのために心の支柱を失った。今まで物を考える方の階級だった人々は茲に放浪の旅に追い出された。多くの人が精神的の行き倒れの死を予感している。しかも皆戦争には負けてはならぬと思っている。眼前の戦に血みどろになりながら、しかも心の隅に宿を失った魂がわびしく震えている.../戦争は何といっても悪である。意気軒昂たるは職業軍人のみ。満州事変―北支事変―支那事変―かくて対米英戦争。幕府的政治。咄！けれども長い間の他の国々のやって来たことも戦争道だった。愛想がつきる！」（B-1943.10/6）

「嵯峨野高女で開催の女子職業指導研究会へ行く。府指導所長より戦局重大・南方に於ける我が敗北・敵の着実な進撃・今後一年の危機・ドイツの危機等の話あり。何を考える余裕も今は無い。ただ飛び込んで戦場と職場とで戦うほかなきを想う。一切は戦争の後だ。今は差しあたり負けないこと―勝利は考えられない―だ。」（B-1943.10/26）

家族を思う気持ちは強く、多忙と全てに事欠く生活のなか、自身の時局認識の変化に書き手は自覚的である。

会社定休につき昼まで休む。四日夜警戒警報、五日解除。六日夜より暴風雨、学校農場一面の湖水となる。忙しい。無休。朝は七時に家を出て帰宅は晩の八時。ものを書くのも読むのもいやだ。手紙をもらっても読むのが億劫。まして返事を書く気にもなれない、戦争のことばかり考えている。ここまできたら、もう他のことを考えていられない。負けてはならぬ。小学生の如く単純真剣になっている。今年の暮れ、正月を無事に過ごすかどうか分からない。

今日は玄米を石臼で粉に挽く。汁に入れて膨らせて飯の代用にするのだ。分量が増えるからである。僅かの食料のための苦労が一通りではない。戦争を考えないときは食べ物を考える。私一人ならどうでもいい。六人の家族のことを思うと心が暗くなる。今年はジャガイモ 25 貫作った。大変助かったが何分にも配給が少なすぎる。百姓と商人と警察と役人と将校は困らぬと言われる。さも

あろう。けしからぬことだ。——どうでもよい。全力を尽くそう。人に物を頼むのだけは厭だ。困ったら苦しもう。仕方がない。ただ戦争だけは心配だ。容易ならぬ事態だ。(1944.8/8)

主婦回想記でもある A は、こうした現状を共有し、70 代後半の C はその変化を記す。C の「いよいようちにも炭がないようになった。おこた出来ず」(C、1944.2.24) に対応しての A は、食糧事情の逼迫の自衛手段として「空き地はもとより道端まで、何等かのものを植えた」、さらに木の根元を掘り起こして薩摩芋を植えるのだが、4 ヶ月ほどかかって肥えたころには「他所の子どが夜中に掘り起こしてとって行った」(B60 頁) とあり、回想記であるためかかえって無念さがにじむ記述となっている。こうした家族の状況に対し、足がいたい C の書き手せつは、もどかしい思いをしばしば吐露しつつ、婿である清市の日々の勤務との両立に身体をいとい、「清市はむねがいたいのにいもをうえる。畑おこし八重も文夫も馬のふんとり」(1944.2.27、C)、「朝から八重は文夫らの配給を右京けいさつまでねがいに行った。四合六勺もらうに長い間まち二時すぎにかえった」(1944.11/8)、「よう手つだいはでけず八重一人でてんてこまい。どうぞつかれがでねばよいと思う」(1945.3/8) 等、主婦である八重の労苦を労う記述も多い。せつは日記からは日々手仕事をし、就学前の次女の子守をする気忙しく働く人の生活である一方、「兵隊さんを思へば」と肉親も含め、知人近隣からの出征が相次ぐ状況に思いをはせ、体調がすぐれないなか「お国のためにならぬもの」という自責のあり方の吐露も多い。

「おひる頃よりさむくて火もなく仕事も思うようにできず、あと先の事考へ恭子を守りしてぐずぐず日をおくり、兵隊さんの事思へば寒いひもじいつらいは思われんと思ひ心をひきしめているけれども足がいたかったり仕事が出来ぬとなさけない。これ以上百まで長生きしたいと思うけれども年よってお国のためにならぬものが不自由な中で生きておりすまぬ様な気がしてならぬ。・・・」(C—1944.2/25)

「今日も又風邪のぐあいがある。あたりまへながらねてもおきても孫らの事が気になる・・・私でも風邪もなをり足もなおりて清市がゆるしてくれたら工場へ行き手になう仕事をしたいと思う。此の大事な時ぐさぐさしておるのはすまぬと、これでも一生けんめい何なつとしている。・・・しつこい風邪である。洗うものがたまって気がもめる」(C-1944.3/6)

「今日は又かぜで仕事もしたりあつたりぶらぶらしてくらした。八重は畑仕事、清市はぼんの九時頃帰りいそがしい。口が乾いてつばが出ず体はたまらぬ程かゆい。又糖尿病がおこったのではないかと気持ちわるい。どうぞ若いものに厄介をかけぬよう、そればかり祈つてをる。昨年足の立たなんだをりの事を思い出してなさない。」(C-1944.3/27)

成人に達した男性たちは次々と徴兵検査を受け、入営が決まり、応召され戦地に向かう直前に家族に顔を見せるも戦死の報の記述にも溢れる。高齢者であるせつは、「日記をつけるのがいやになった」(C-1944.9/10)、海軍への出征が決まった自慢の孫の「宏ちゃんが征くのは悲しい」(C-1944.9/7)の一方、学徒出陣による孫の出征について「塩尻の家から兵隊が出るのは初めてであり、てんとう様に申し訳があると思ってどうぞ・・・ご奉公するよう」(C-1945.1/29)と気持ちがゆれる。こうした日々を、立ち行かなくなった都市部の生活環境が覆っていく。「電気、ガス等も時間制、燃料がないため借家の床板羽目板をはがして燃やしてしまったとか、庭の植木も燃料にばけた」(A-61頁)なか、一家の「主婦」としてAは、町内で荷車を仕立てて御室の奥山へ材木とりにもいった。街の声を観察する清市は以下のような声を拾う。

「40日ぶりに散髪をする。電力節約のためとて午前九時からごと七時までである。髭を剃っても洗ってはくれない。65銭である。床屋の若い方の主人は徴用検査を済ませて命令を待っている。「今年中にえらいことが起こりますぜ」と言う。敗戦のことである。/或る人が田舎へ帰るので手持ちの木炭が不要になるというので分けてもらいたいと言ったら衣料切符を百点よこせという。それで炭は諦

めた。中京方面には貸家売屋の札が沢山出ている。畳建具を取り外してあるから住める家ではない。或人曰く、京の町は死相を呈している、と。昨日から米10日分のうち一日分メリケン粉、一日分大豆カス」（B-1944.3/9）

「宏ちゃんの千人針がまだ完成しない。老母が一人気を揉んでいるが、実を言えば私共はもう狎れっこになって、あまりこの様なものに興味を持たなくなっているのである。／銃後は今食料の話ばかり。みな、負けてはならぬとは思っているが、そして改まった席では異口同音に「必勝の信念」を高らかに口にするが、現実には人々の頭を支配しているのは食べ物の問題だ。ただ不思議なのは誰も皆割合元気そうな顔をしていることだ。」（B-1944.4/7）

「京の町は死相を呈し」「銃後は今食料の話ばかり」。さらに燃料欠如は都市の人びとの暮らしを劣化させ、シラミと風呂屋のエピソードも読むものに強い印象を残す。「風呂もわかせないから風呂屋が営業する日は皆押し掛ける。芋の子を洗うような風呂屋では、頭ジラミ、着物ジラミをすぐもらってくる」（A-60頁）。八重の回想記はこの記述のあと、しらみの湧き方に多くのページ数をさいている。戦時下の暮らしのなかで強い印象を残したことが窺える。せつの日記にも、帰宅した長男が「休みで元気よく来たけれどもしらみうつりてそのままにおいておく故、山程おきばのない程わかし、あんなしらみは七十七になるけれど見た事ない。八重ちゃんが又大仕事」（C-1944.3/1）とある。しらみ駆除の最中に日記をつけることは八重には困難だったことだろう。せつの日記には、風呂屋の時間制限は「年寄りと子供」は4-6時、女性は6-9時に制限がかかった（C-1945.2/5）。子供を風呂屋に連れていくのは時間帯からみて銃後の主婦ではなく年寄りの仕事となったことも予想される。制限前の1月、清市の考察は以下である。

「風呂。ひどい混雑。汚い。湯の中に黒い綿のような汚物が一杯ゆらゆらしている。料金も6銭が8銭になり12銭になった。しかもむやみに汚い。薪がないから皆風呂屋に行く。いくら汚くても客は来る。いくら料金をあげても来る。近頃

は商売でもこの調子・・・戦争になを借りて必要以上の無茶苦茶をする。軍人と警官と役人と有力者と金持ちと物持ちは困らぬ。・・・もつと皆が良心的にやれないものか。困らなくてもすむことまで、まるいようにしてしまう。国民の日常生活の仕方は戦争に勝つ国の状態ではない。敗戦国の姿だ。危ない。実に危ない (後略)」(B-1945.1/11)

4. 空爆下の日々

アジア太平洋戦争末期の1945年4月、徴用の長男、出征中の次男とは別に、76歳、46歳、33歳となった成人家族3人と嵯峨野高等女学校の13歳、3歳の一家は何鹿郡東八田村上杉(現在の綾部市)梅迫に縁故疎開を決め引越した。疎開生活は以後、食料事情もあって敗戦をはさんで5年に及んだ。

大都市空襲が本格化するのは1945年3月以降だが、軍港に加え近隣に軍事施設があった舞鶴-伊佐津に療養のため滞在していたせつの日記では「空襲警報」の登場は一九四四年七月七日と早く、縁戚の人たちと「道端の防空壕へにげた。こんな時には度胸がすわり生まれたとこで皆と一しょに死ぬとおもた。京都の事心配。そうこうするうちに警戒警報になって助かった」(1944.7/7)とある。しかし京都市内、花園エリアでも防空警報の語彙はせつの日記には11月になると頻出し、12月には「今日は警戒警報もなく無事にくらしした」(C-1945.12/14)、「防空壕屋根のこしらへ」(1944.12/19)⁷、「昨夜三度もサイレンでねられず」(C-1945.1.9)の日々である。年が明けても「いつもの正月なら三日間はあそぶけれど兵隊さんの事おもへばじっとしておられず」(C-1945.1/2)、慰問用の人形作りなど日々の手仕事をせわしなく再開させようとする。

Bの2月3日の日記は「「敵一機紀伊半島南端を北上中、阪神地方に向かうとすれば20時10分頃到着の見込み―」ラヂオが言う。夜。近頃は毎夜のことである」とある。

一家の「疎開」の検討は年明けからだが、この時期、京都東山を襲った馬町空襲は市民を震撼させた。空襲のなかった京都像への反証として出されることも多く、初期空襲としての被害は甚大である⁸。Bにその記述はない。家族の生活圏からは相当に距離があったが、Cのせつの記述には、京都市内・東山馬町

空襲の情報は「あまり大したことではない」(C-1945.1/17)から「東山の馬町はしょうい弾ではない爆弾を8個おとして大変なことでしたといわれびっくりした」(C-1945.1/19)、「昨夜はサイレンが夜明けまでに三度なり、帯したままでろくにねなんだ」(C-1945.1/20)へと変わる。Aの『八重年代記』にも同様に、京都市内各地で行われた建物疎開と馬町空襲の被害について記述がある。戦時下京都のイメージとして看過されがちな「空爆」経験に、日が経つにつれ女性たちが強い衝撃を受けていたことがわかる。

加えて日記からは、足を悪くしていた高齢者にとって「この月無事足手まといにならぬよう皆無事なよう祈りながら人にあげる人形の着物ぬい。戦時下にこんな事するのは気がすすまぬけれど」(1945.2/1)、「寒いし痛いし今空襲があったら足手まといになる」(C-1945.2/26)という懸念が頻出する。疎開を決め、引越し準備で八重に加え清市も「ぼんに帰りものという間もない程忙しいといい、わしも言いたい事もたくさんあるけれど(そかいの事、文夫のこと)ようゆわぬ」(C-1945.3/8)。夫婦が多忙をきわめるなかでの以下はセツの日記にしては長い。

「うつうつしていたらサイレンがなりまた来たかと思っていたら八重が早くおりて来な、空襲だといい、よういをして穴へ入った。穴はこの間の雪と雨とでじめじめしておりむしろはべたべたさむいとてにおうしわしは足がいたいであるいながらながいこといたら、今大阪がやけておる、京都へは来るようなさそうなので出るがよいというてむかいにきてくれた。ほんとにわしは足手まといである。穴におる時より雨降りはなつまみでもわからぬ真の闇」(C-1945.3/13)。

大阪大空襲の夜である。Bの記述には「翌日も京都の空が暗かった。町には大阪から避難のけが人多し。悲惨なり」(B-1945.3/14)とある。疎開準備は家族の多忙さに拍車をかけた。さらに空爆は戦争弱者をあぶりだして孤独にさせる。戦争は高齢者に家族のなかの「足手まとい」という心の負荷をかけた。自責の念は切実だったと思われる。

一方、後述するように、七月、清市は「光華三年 200 名綾部丹山工場へ出勤」

の付き添い教員となった。京都市内と疎開先の間となる工場動員を記すB日記に空爆の記述はしばしば登場する。

「警戒警報で起床、4時40分。生徒を連れてしていると寝ている訳にいかない。5時40分現在敵機は若狭湾上空で行動中という情報が入る。今朝は警報発令前に敵機は当地上空を通過した由。五時すぎ警報解除。静かな朝である。雀が啼く。鳶が啼く。/19日の夜は待避をした。長時間の警報で相当多数の敵機が近畿地区へ来た。舞鶴の方向の夜空に閃光が散乱する。焼夷弾が落ちる。爆弾・高射砲の音がする。敦賀がやられて次は舞鶴だと言っていた所である。何時の空襲でも敵機は思うままに行動する。我々はただ不完全な壕に待避するだけで何事もなし得ない。既に本土の制空権も敵に渡しているのだ。」(B-1945.7/22)

「今朝も舞鶴地区へ大型小型多数来襲。彼方は手も足も出ない。ただ警報だけはどうまく出す。待避もする。それだけだ。焼爆を怖れてバケツ送水の稽古をする(何と現実的なことよ!)。焼かれぬ先に手前で家屋をとりこぼつ。そんなことで待ちも工場も大騒ぎを続けている。そして結局全部焼かれるのだ。何と無駄な馬鹿な騒ぎだろう。」(B-1945.7/24)

5. 「俸給や賃金で暮らす者はどうにもならない」

1944年段階では、病を悪化させ、舞鶴の実家である伊佐津で養生していたせつが「清市八重より手紙つき食べものがないあわれな手紙」(C-1944.6/26)と嘆くほど京都市内の食糧事情は逼迫していた。京都に戻ったせつは久々の家族と「面白い事をゆいわらいわらい家に帰った。皆かわった事はないけれど食べものの変わりようが思たよりひどかった」(C-1944.7/9)と見る。これまで引用してきたように清市の日記には度々、生活インフラの欠乏が「食料が足りない、燃料がない、下駄がない、草履がない、傘がない」「俸給や賃金で暮らす者はどうにもならない」(B-1944.10/7)と都市住民が置かれた環境および家族の食料事情の悪化が構造的なものとして指摘される。物価高騰はまさに生産手段を持たない俸給者の生活を立ち行かなくさせた。

「昭和20年に入った頃」「小豆ご飯を沢山炊いて、わざわざ京都まで疎開のお話に来てくださった」（A-62）本家の誘いをきっかけに、3月、清市が上杉を往復して諸事決定、4月5日、家族を送り出し、生活を落ち着かせたのは5月31日。改めてそのいきさつを振り返った清市の日記には長い独白がある。

疎開を決めた同時期、市内からは家族の自宅やそのエリアには避難者がやってきた。「変な話だ。私の家族が疎開したらその後へ水島家が疎開してくる。他の者までが避難してくる。もっとも此処は市の周辺部で直接の爆撃さえ受けなければ火災の方は割に危険が少ない」。ではなぜ家族は疎開を決めたのか。

「私が家族を疎開させたのは主として食料の苦しみのためだった。老母や妻は爆撃をも怖れていたが、私はその方は大して気にしていなかった・・・ただ毎日の食料燃料などの苦しみがやり切れなかったのだ。たとい不自由でももっと楽になるというので疎開を決意したのである」（B-1945.5/31）

すでに元の自宅の階下を京都市内中心部から「疎開」してきた知人に住まわせ、2階から職場の光華高等女学校に勤務する清市は、物価高を換算し、「私の俸給はサバ二匹か米五升ほどの収入」であり、「学校はうまく動かぬ。私はもうあの学校に執着はない。いつ退職してもよい。闇で物価が上がって俸給で家族の生活を支えることはできなくなったから、俸給をもらうことも殆ど意味がなくなった」（B-1945.5.31）という。この日の日記は珍しく、書かれた状況まで記されることで、京都市中の様子も具体的だ。

「京都の人々も沢山方々へ疎開している。中央部は特にひどい。空家売家が沢山ある。強制疎開でたくさん家が潰された。家屋強制疎開はどれだけ役に立つだろうか。焼夷弾攻撃を受けたら、どっちみちダメだろう。まるで敵に焼かれる前に、敵に協力して自分の手で自分の家を破壊しているようなものだ。人々は持ち物も方々へ疎開させている。力仕事などしたこともない老人までが荷車やリアカーを曳いて、目抜きの通りを行く姿も当たり前の光景に見える。混乱・恐怖・・・昨日から市内の学校が登校を停止してから町の混乱は特に甚だしい。大

騒ぎらしい。記せば限りがない。/ 今夜の8時40分、灯火が外へ漏れぬよう雨戸を閉めふすまを締め切って二階四畳半にこもる。暑苦しい。家族は梅迫にいる。久々に己にかえる。心が無くなったような生活だ。落ち着いているといえば落ち着いている。風に乗って浮動する落ち着きである。生活に形がない。戦争ばかり考えている」(B-1945.5/31)

「近代京都」をめぐる歴史研究が様々な手法で「古都」イメージを批判的に明らかにしてきたように、京都近代史とは、移住者が集う都市史であり、特に昭和初期では周辺部での開発が進み定住者人口が急増し、京都市生まれの世代が育っていった。強制建物疎開に空爆、食糧難、縁故先が近隣の郡部にある点で恵まれていたとはいえ、清市の「苦しみ」は京都に移住し、幼い子どもを含め、家族の暮らしを支えた人びとの困難だろう。加えて清市は苦学して教職資格を得、さらに研究を続ける人であるにもかかわらず、「英語教師はこのところ一種の失業者である」(B-1944.4/7) 状況にも置かれている。都市部の旧制中学校や高等女学校というネームバリューの高い学校であっても「英語」科目担当であることは批判の目を向けられる時代であった。だが清市が英語教員としての勤務校を一旦やめる選択をするのはむしろ、「先生、福知山管理局の英語の先生になる気はありませんか」(B-1945.9/5) とその語学能力を囑望され、元の学校で「再び英語を教えることになる」(B-1945.9.10) 後の直後、戦後のことだ。本人の「略歴」によれば、1年以上の「浪人生活」となる。アジア太平洋戦争末期の1945年6～8月、家族の疎開先と自宅を往復しながら清市が続けた職務は、光華高等女学校生徒を勤労働員先の工場（綾部の丹沢工場）に送り出すこと、さらにその工場への付き添い教員としての着任だった。責務を強く自覚しての決断であったが、工場側の労務管理には構造的な問題があり、そもそも食糧難のうえ、生徒の親の心情は明らかで次々と交渉ごとが生じる。

「家庭では恐らく皆が困ったことになったと考えたであろう。それが当然なのだから。私だって子供の親としては出すのは厭だ。殊に食物の不自由な時だから不安である」(B-1945.6/11)。

このため清市は付き添い教員に対し、差し入れの間食も含め「食堂で生徒と共に食べる物以外は一切口にしないで欲しい。苦しいだろうけれどもこれだけはぜひ承知して行って頂きたい」(B-1945.6/11)との要請を行なった。

この措置の理由として日記は、食物をめぐる生徒が教員への信頼を損ねる事例を多く聞いたからと記す。実際、迎える工場側も最初の食堂での食事は「我々教師だけは大食堂の片隅の幕で仕切った、生徒に見えぬ場所へ案内された」ので、打ち合わせと異なるとして「生徒席の方へ移動」させ、2回目は生徒より「皿数が一つ多く」、取り除かせた。「それ以来は全く生徒と同じになった」(B-1945.6/11)。

「食事は・・・甚だ少量だった。食べ盛りの生徒達はさぞ苦しかっただろう。それでも文句は言わない。私は心の中で泣いた。私も空腹だった。慣れるまで約一週間というものはとても苦しかった。・・・それでも私は責任を背負っているから辛抱しやすいのだ。生徒は本当にくるしかったらと思う」(B-1945.6/11)、「・・・という生徒のお父さんが訪ねてきて、子供は元来弱い子で、どうもこの生活には堪えられぬように思うから帰宅させてほしいという申し出。・・・私自身だって同じことを考える。全員体重減少、疲労衰弱を見せている。けれどもそれでは動員体制が崩れる。またそのような処置を許されもしない。・・・その上工場側では工場の医師の診断に依ってこんな問題は解決しようとするが、工場の医者はなかなか帰宅できるような診断をしない。少々痩せていても健康体だというのである。私は苦しむのである・・・最近このような難問題が非常に増えた。もう父兄には戦意はないように思われる」(B-1945.7/27)

これらの記述は先にも引用したように、「警戒警報で起床、4時40分。生徒を連れていと寝ているわけにはいかない」(1945.7/22)、「今朝も舞鶴地区へ大型小型多数来襲」(7/24)という状況下での記述である。このような教員と生徒間での食料をめぐる壁をとにかく回避しようとする組織のリスク管理的発想を持つ清市の姿勢は同時に、「工場」と生徒の間にたって彼女たちを守ることに向けられた。自身のいう、ヒューマニズム思想として一貫性を持つものだろう。

それは早い段階での以下のような観察による。

「当分健康恢復に全力を注ぐべき也。此の工場は女工を使い慣れている。極限まで働かせることになれているが、生徒達はそんな具合には行かない。時間延長についても、かなり手厳しいことを言って拒否して来ているが、どうもこの点について工場側の関心が足りない」（7/30）（ゴシックが引用者）

「極限まで働かせることになれている」という軍需工場の労務管理体制のなかでの勤労動員である。清市の監視の目は工場から生徒を守ることに向けられる。しかし同時にそうした境遇への保護者の懸念は強く、その要求は増加の一方で「Hという生徒が蕁麻疹」で一時帰宅、その後父親から「心臓性脚気」で4ヶ月静養を要し、「転出証明を送」と連絡があり、清市は「もう戦争は完全に敗けている」（B—1945.7/31）。さらにこの日の記述に続く8月2日の日記は生徒の親からの様々な理由による「帰す」に溢れた。切符の手配も清市が「駅へ行って昔の教え子の助役に頼んで切符を買ってやるのである。そうでないと容易に切符も買えない」一方、教員側も戻ってこない。「あとの代わりの先生も来ない。何を言っても学校からは手応えはない」（B—1945.8.2）。混乱の極みのなか、近しい肉親の戦死と同僚の子息の戦死の報を共に受けた翌日、「本日ビタミンB2を買って全生徒に今日から服用させ始める。手数はかかるが継続させたい。乾燥サナギも考慮中。長い間家へも帰らぬ。妻子にも会わぬ。宏の戦死等々。凡て知らぬ顔で此处に没入した生活だ」（B—1945.8/3）。次いでソ連参戦の報を受けた8月12日には「近頃の軍事動員はどうしたことか。無闇に動員して兵隊ばかり作る。そして生産現場を空っぽにする。これは対戦不能になる。万事血迷ってきた。とにかく最終決戦になった。私の命もあと半年以内か」（B—1945.8/12）から一転、8月13日は「昨日は終日、主として面会者の応接に多忙」とある。ブルジョアに迫られる日々である。家に帰らない真意は「8/13」からとんで「8/18」以降の記述に散見される。郡是の丹沢・綾部工場は鉄道交通の交差点としての要所であり、「舞鶴の序でにきつとやられる。工場は駅のそばだ。生徒を死なせて私が生きるわけにはいかぬ。しばらく前から私は危険を感じて死傷者が出た

場合の手配を喧しく工場側へ交渉していたのである」(B-1945.8/26)と記した清市は「8.14」に明日重大放送があると告げられたことから女学校2年の長女に「もう家へは帰らぬ、皆で機嫌よく暮らせよ」と別れを告げたと記す。

こうした清市の日記は日々の記録であるとともに、同時期にあってもやや間をあけた、それらの意味づけを含めた内省的な点に特徴がある。せつが戦時下で日々募る日記が「よいはぬ」をはらす営為であったとするならば、清市の「書く」行為もまた自身の行動とこれを支える哲学を見つめる営為だろう。最後に改めてBの手記を軸に、都会生活者による疎開生活を見てみよう。

6. 疎開先の暮らし 1

工場動員以前の清市は、市内右京区西京極の光華高等女学校に転出していたが、職場と疎開先の舞鶴線梅迫駅を行き来して不在がちであり、工場動員勤務と戦局の悪化はそれに輪をかけた。「苦しい」職務遂行の一方で、20代の男子を根こそぎ動員され、唯一の男手を欠いた一家の疎開先の暮らしは困難を極めた。

疎開先での借家住まいは1945年4月5日から始まった。しかしそこに至る過程でも平時ではない動きが複数の記録によってわかる。

引っ越し以前、次男の出征時では近所の人もあつまり、「うちのものも二階から汽車のとほるのを見て大きな国旗をふりてばんざいゆうておくってやった」段取りもあり、「八重の忙しさペンには書けぬ」(C、1945.3/7)状態であったが、縁故疎開を決意してからその手続きは難題だった。

「八重疎開の事で区役所へいきばんぽんゆわれたといいふんがいた。「田舎へ逃げていんだら食べものがあるてよいけれどもそうはできぬ」というたげな。清市ひとりをおき・・・なれたわが家をおき放し・・・名残おしい。けれども年よりや子供らは清市の足手まとになるし又食べものもないから帰るのである。わしは上杉出から五十一年になる。幸か不幸か長生きして五十年、あとのひとたちは大かた死んでおる。その中へかへるもの気がひける。それでも戦争だから足手まといにならぬよう涙をのんで帰る」(C-1945.3/12)

防空法は銃後の民間人に防空業務を求めた。「疎開」は行政からは、「そうはでけぬ」離脱行動であったことがわかる。しかし疎開先の居住空間も、「古ぼけた下二間、二階二間、土のくど一個、井戸流しは外で屋根なし」、「疎開しても京都と同じ事で、生活環境は依然厳しく、米を売ってもらえる所はなく、早速かぼちゃ、芋等換えるもので一日凌ぎながら、俄百姓を始めた」（A-4月10日）。不便なうえ、食料事情という点でもくらしは期待を裏切った。さらに一家は舞鶴駅前保持していた家が建物疎開の対象となりこわされる。

「今度は舞鶴駅前の家を潰すから中のものを取り片付けに来いという通知。駅前の防空活動をし易くするため。その辺一帯の家を強制取り払いするのである。主人は留守。トラックは徴用でとられているから皆無。・・・非常時であり誰も頼めない。手伝ってくれる人も誰もない。皆それぞれの家庭のことだけで精一杯なのだ」（A 62 頁）

強制疎開の連絡がかなり急であったことがわかる。トラックはもちろん「リヤカー等はどこにもな」く、「俄百姓」は荷物運搬すらままならない上、人に貸して戻してもらった畑は「肥料気を吸い尽くしているから、7年間は作物が実らぬ」（A63 頁）状態にある。まずは拾った馬糞を施肥とし、藁をしく。慣れないうちは計画通りにいかない。近隣で入営挨拶が来れば小豆ご飯を炊いて家族もお相伴にあずかる。結果、「直ぐさま八重は晩に食べる米がないので伊佐津（舞鶴の本家一引用者）へとりに行った。あまりのドサクサで飯ばかり食べたので四日分食い込んだ。私は何もできず恭子つれてるすばんするのが関の山」（C 1945.4/17）。4月は畑仕事に忙しいが「今日は春さんに肥持ちに来てもらい・・・日雇賃十五円払た」（C 1945.5/2）と農作業には人手が必要な状態であり、だがあいかわらず「飯が沢山なく分けて食べた・・・働くものや子供には食べさせならんで、これも戦争」（C 1945.4/25）、「清市は五時ごろの汽車で来た。いつ来ても食べさすものがないので気の毒。わしはひどく痛く情けない」（C 1945.5/10）、「一晩で清市かへるので一升飯たいておべんとう持たせ皆が食べた一つものこらなんだと八重がいうた。家のもの全部の配給が一日八合であ

る」(C 1945.5/23) という日々が続く。清市の帰りは突然だったらしく「びっくりしたが、清市も家の事が気にかかり、帰るとすぐ肥タゴを直してくれた」(C 1945.5/22) とある。特に農作業に不慣れな様子の八重についてはセツも娘のおぼつけなげな様子が印象に残ったようで、

「八重は肥やしをもって旗投へ行く。なれぬゆえ、肥たごになってへんな格好してになうので持つすべを教えてやりたい。ものをになう体のそなえが出来ずおかしいやらかわいそうなやらしばらく後ろから見ていた。山の蔭で見えぬようになった故、内へ入り世のうつりかわりをくりかへし思いかなしい」(C 1945.5/25)

京都市内での一家は俸給生活者であり、水道もガスも台所もある生活だった。縁故疎開でもあり、近隣の親族からの差し入れもある比較的恵まれた条件にある一家だが、男手を欠く家族の女性への負荷は顕著である。日々の食べる事を満たすのは容易ではなかった。

Aは「毎日つぎはぎだらけの物を身につけて、真っ黒な顔に頬被り、短い車を牽いてまるで漫画のようであったろう」と自身を想起し、4歳の子どもと高齢の実母をおいて昼の弁当は「芋の蒸したのと希少価値のだしじゃこを数匹」という様子を「村の人達が皆憐みと驚きと幾分の蔑みをもって見ていた。ある人が「箸より重いものを持った事のない人が可哀想に」と言った」(A) とみる。だが八重の働きぶりはまさに家族の暮らしを日々ささえるそれであり、自身もその自負があったのではないか。

「道不審の人足にも山の防空壕堀りにも、兵隊さん戦勝祈願のお詣りにも、全部参加せねばならず、食物買い漁り、もう作業と毎日無我夢中であつた。こんな山峡の空を舞鶴から綾部へぬけるB29が唸りながら通って行つた。舞鶴軍港に爆撃があつた晩は、北の空がまっかに染まり、曳光弾サーチライトが飛び交うのが見えた・・・」(A-65)。

防空法下、大日本婦人会の地域の婦人会組織への業務の一つは防空知識の啓蒙であった。八重の防空関連用語の詳しさからはそうした「学習」の成果を見出すことが可能だろう。

もっとも回想記Aにみる八重の働きぶりは「8.15」を区切りとしない。その記述内容は、1951年と思われる時期にこの回想記がまとめられたことと深く関わっているように思われる。家族にとって1945年8月以降とはどのような時期だったのだろうか。

7. 疎開先の暮らし2

まず清市は勤労動員先での生徒および保護者への対応に多忙である。Bは8/13からとんで8/18、ついで8/26でその間の動きが総括される。

「17日学徒引き揚げ決定。19日朝全員引き揚げ完了。引き上げは鉄道との交渉などがうまく行って非常に順調にやれた。20日工場に帰り残務一部整理。21日朝上洛登校 生徒に配布すべきものを配布。22日梅迫へ帰る。……この日(15日)後援会委員の慰問来訪あり、一泊される。あらためて、夜、ポツダム宣言を読む。たまらなかった。やはり強者の弱者に対する条件であって、必ずしも正義の不正に対する条件とは言い難い。けれども最早敗戦は事実であり、無条件降伏は現実であった。そしてこれは当然であった。我々は天罰を受けた。泣いても悔いても追いつかない。ただ、戦争が終わったということ、最早燈火管制が要らぬこと、明るい燈を遠慮なく灯せること、そしてあの横暴な軍部が最早無くなるということ—これだけは何といっても—うれしいという言葉では言い表せない。とに角何というか、本能的な—なんだか頭の上の暗い幕が除かれた気持ちだった。/8月16日、夕食後生徒を集めて凡てを話した。生徒は泣いた。けれども彼女達はまだ十五・六歳の少女である。泣いてもすぐ笑う。あわれである。しかしこれが若きなのであろう。私は二つの事を彼女達に要望した。一つは今後の物質生活の低下に対する覚悟、もう一つはまけても日本人の誇りを失わず、全く新しき形の国の力を養うこと。」

清市にとっての記述の順序は、敗戦国としての立ち位置について生徒の処遇、しかし家族の元に久々に戻った時点での記述もその記録性は高い。

「16日夜梅迫へ一寸帰る。11時頃である。汽車は二時間延着した。帰ってみると家には誰もいない。隣のEさんの家へ行ってみると、そこへ皆集まっていた。村に駐屯している海軍の設営隊の経理係の兵が四人、一升瓶を二三本（こんなものは民間では得られない）持って来て、飲んでいる。砂糖（これも民間には無い）を持って来て蒸しパンを食べている。先生も上がって話さないと言うから上がってコップ酒をあおりながら話す。彼等はどうしても降伏は出来ないと息巻いている。自分たちが外地で戦勝の際やったことを思うと（この告白は哀しかった！）、奴等も同じ事をやるに違いない。そんな事は到底堪えられない。自分たちは一人になっても戦い続ける、と言っている。隊長はどうしていると言くと日本刀を磨いていると言う。

17日朝学校から引き揚げ命令が来た。工場側も午后之に同意し、私はぐずぐずすると汽車が混雑すると思って至急鉄道の手配をして、18日帰校準備、19日には全員引き上げを完了した。工場側は実に親切に世話をしてくれた。不在者の荷物には苦勞した。帰校して私は悉く敗北した思いだった。A氏に会っても、私が追い返したTさんに会っても、個人的に敗北した思いだった。真剣に戦った者ほど敗北の感が深い。動員学徒の苦勞をよそに、しかしながら口では必勝の信念だの大詔だのを云々し、いい加減にやって来た人々が勝利者の如く見える。/府庁から出かけると正門前で市の某商組合理事長T氏に会う。白麻の背広に蝶型ネクタイ、日傘という戦前の紳士姿である。尤もこの人達は戦争中も食にも衣にも困っていなかった。・・・この夜（22日）梅迫へ帰って海軍設営隊の隊長を訪ねてみた。初対面である。強いことを言っていた。ところが家へ帰ってその話をすると、なアに、あの隊長さんは昨日海軍のトラックで沢山の荷物を京都の自宅へ運んだんですよと言う。つまり部隊に集積してある海軍の物資—飢えた国民の膏血を絞って集積した物資—を私して運んでいったというのである。のみならず下っ端の経理兵等もしきりに軍の物資を盗んで荷物を送り出しているという話。私は憤慨し、がっかりした。・・・馬鹿な私は、降伏後東京で

は責任ある軍人が多数自決する、舞鶴でも多くの将校が切腹するだろうと思っていた。・・・舞鶴海軍の物資持ち逃げの醜態を聞くに至っては、もはや言うべき言葉がなくなった。まるで敗残兵のような泥棒をやっているというのである。/ 舞鶴行き。川北に一泊。町へも行ってみる。舞鶴で喧しい話題は海軍軍人の極度の醜態非行である。帳簿を焼いてしまって物資の我勝ちに取って行ったという。今まで国民の塗炭の苦しみをよそに、多量の物資を集積し、何不自由なく飲食していただいても国民の反感を買っていたのに、敗戦となると腹を切る代わりに公の物資を勝手放題に持ち逃げした。否トラックでしこたま運んだ者もあるという。兵隊が背負えるだけの物を背負って帰郷するだけならよろしい。しかし将校が、而も上級将校が大がかりに盗むに至っては、許し難い。こんな腐った軍人共で何が勝てるか、負けるのが当然だ、という声が舞鶴でも梅迫でも会う人毎に聞かれた。・・・「(B-1945.8/26)

「帰宅。車中舞鶴の徴用工あり、やはり軍の泥棒行為を攻撃していた。三ヶ月分 200 円を貰って徴用解除だという。その後の生活について暗い気持ちを持っていた。転業資金というものを半年分もらうが、それは定期預金だから仕方がないという。元は西陣の業者。西陣は復活し易いではないかと言うと、糸が無いから駄目だという。」(B-1945.9/2)

「綾部行き。工場は女工全部解散して職員だけになっていた。ひっそりしていた。綾部高女滝本校長に会う。軍人の醜態を攻撃し、今までの独善横暴を攻撃し、日本は敗戦で却ってよい国になるんだと、むしろ喜んでいた。」(1945.9/3)

「舞鶴行き。綾部駅の助役 S 君が、先生福知山管理局の英語の先生になる気はありませんかと言っていた。鉄道員が皆英語が必要になったというのである。川北の近所の無学なおばあさんが、そのうちに田地も、持っている人から取り上げて持っていない者に平等に分けてもらえるそうですなアと言っていた由。浜田君を往訪。海軍へ出入りして見聞きした物資持ち去りの醜態を話して極度に憤慨している。軍人が倒れて国民は降伏になったと敗戦を祝していた。崎田君

往訪。同様の話。長い間の軍人の横暴を見てきての話。もし勝っていたら国民は軍の重圧の為塗炭の苦しみをしたであろうという意見。水島氏往訪、同様の話。堀江酒店でも軍の悪口。/ 多くの人々に会ってその考を総合して一つの結論を得た。国民は今敗戦を喜んで一時明るい気持ちになっている。それは軍が倒れたからである。軍が倒れたためにこの敗戦・無条件降伏をさえ喜ぶほど国民は軍に反感を持っていたのである。」(B-1945.9/5、9/8)

「今私の頭はぼけている。私はどうしたらいいか。敗戦にもあきらめが出来た。日本のやったことは悪かった。弁解はしない。」(1945.9/15)

B 日記の 8-9 月は目まぐるしく、しかし記述の分量は多い。勤労動員解除が長引き、保護者とのやりとりに追われる業務が 8 月いっぱいにならずに済み、ここでは引用しないが、教員そのものをやめるという点で人生の大きな決断がなされている。9 月 15 日に至る記述は軍に少しでも期待感のあった自身の悔悟と大きな主語としての「日本」が行き来し、人びとの声を書き留める。清市の決断の背後には、梅迫や舞鶴での旧軍のいわゆる「隠匿物資」略奪の記述への怒りや失念も少なからず影響があったように思われる。いずれにせよ外部の情勢を立場性を持って描く B 日記の筆致に対し⁹、A の回想記の焦点の当て方は異なる。

A の 1945 年 7 月 15 日日付の回想は本家の近い親族で、学徒出陣から海軍少尉となっていた青年の戦死広報にはじまる。家をついだ清市の弟は「33 才の妻、年老いた両親、子供 4 人残し沖縄にて」戦死した。他にも知人の近況は多く、子ども等が遺児となった記述が続く。舞鶴中学校の教え子では「クラスの三分の一が戦死した年度もある。私の友達も大勢、夫たちが死んで未亡人になった。親戚の徳田幸治さんは 43 才で子供を 6 人おいて二度出征、命拾いして帰還された。」記述の内容からは 1945 年以降の情報が含まれるものの、近い人たちの戦死、残された子どもや家族に想いが向かう。しかし同時に、A においても、「兵隊たち」の動向が窺える。清市のそれが組織の上層部への腐敗に向かうのに対し、八重の視線の先には「隠匿物資」そのものがある。

「前の小学校から、駐留している兵隊たちが隣の下駄屋に集まって来た。私共がしなかった食糧倉庫から、酒、缶詰等珍しい食料品を沢山に持ち出してきて、その晩から毎晩のように、飲めや歌えの大騒ぎ。聞けばそれらを監督せねばならぬ上官が、物資を持てるだけ持って逃げてしまったという事である。・・もう軍歌とはきっぱりおさらばであった。綾部へ勤労働員されていた光華女学校の生徒も清市が連れて京都へ帰った」（A—65 頁）。

京都市内の食糧事情は悪いまま、長男の不慮の死や復員した次男の「結核性脳膜炎」による急死、さらに親族の戦死情報が続くなか、一家の疎開生活は継続された。

「片山首相「経済危機突破の道」（新聞）の中で曰く。「新価格体系の計画基準として政府が決めた賃金の工業総平均月 1,800 円は、戦前の 30 倍前後であり、物価は概ね戦前の 5-60 倍に引き揚げられている。闇物資購入を考えればもっと上がっていると思う。この村（綾部の梅迫）の若い男女の服装は京都のような大都会よりも立派に見える。百姓の生活は都会人よりずっとよい。」（B—1948.8/18）

「これから冬にかけてどうしたらいいのか。電灯は 30 分おきに 30 分乃至 1 時間消える。燃料の配給も闇買いのルートも持たないから火の気も無い。この前の冬はまだしも停電が少なかった。現在の状態は昨辺よりも遙かに悪い。いつまでこれが続くのだろうか。」（B—1948.11/11）

とはいっても、「浪人生活」を経て京都府立第一高等女学校の 1 年半を経、昇格した京都女子大学にうつった清市と京都府立一中（学制変更で途中から旧府商の新制・西京高校へ）にそれぞれ通う長女は京都の自宅に暮らし、週末には食料を取りに来る別居生活である。A の書き手は農家経営者となる。1946 年春、「初めて田圃 6 畝程を作る殊にした。荒仕事は日雇い人夫頼りである」が、講演を綾部まで一人で聞きにいき、「黒沢式稲作法」にふれ、「21 年秋に初めてうちでとれた餅米で餅つきをした」、次男の急死とともに記述されるこれらの出来事

は「もう少し栄養のとれる状況であればと悔いはつきない」（A-68-70 頁）。この時期の日雇い人夫とはどのような人たちだったか記述はないが、八重はその後「人手」に頼りながら農家経営を続け田畑を拡張していく才覚の持ち主でもある。同じ時期の清市の京都市内風聞は以下。

「女子大の俸給 7,200 円の 16 ヶ月分、之に家族手当を加えて月額 10,000 余になる。税を引けば手取り月平均 8,000 円である。とても暮らせぬから何か内職を考えねばならない。勿論俸給に対する不平ではない。それは承知で行ったので、収入は公立高校より少し悪いだけだ」（B-1949.5/10）

「母子四人心中。九才を頭に三人の子を抱えた母。配給を受ける金も不自由。泥棒に衣類も盗られた。主人付 8 千円持ち帰り（これは五人暮らしの私の月収とほぼ等しい。しかし私は外の仕事もする。）—寒いような気がする。数日前にも自殺数人あり。」（B-1949.5/29）

こうした都市部に一家で「京都へかえる」ことになった日付は正確にはわからない。清市の日記には記述がなく、八重年代記の末尾の「私はまだ 40 才」からは 1951 年もしくは 1952 年となる。この年次は A の回想記が書かれ、「これからは少しはよい事もあろう。一応、ここで一区切りとしたい」（A-73）という記述の動機やまとめられた時期として説得的ではあるが、疎開生活の終焉は清市日記の記述にてらしても時期的にあわない。1950 年 6 月以降の B 日記は朝鮮半島情勢で溢れている一方、清市の日々の暮らしには日常的に次女が存在があり、やさしいまなざしが注がれているからだ。また 7 月 6 日、八重が疎開先の「梅迫」に行く一を最後の B 日記からこの地名は登場しないことから 1950 年 6 月以前、作付けや次女の就学環境を考慮するに 1950 年の春、京都に戻ったのではないだろうか。

一家が「5 年間の疎開生活」を終えた事情について A は以下のように記す。

「清市が夏中暑い二階の部屋で作った大阪図書の字引の代金が 5 万円入って、京

都へ帰る費用が出来た。5年間の疎開生活であった。味噌を作って樽3つに詰め、りんご箱5個に昨秋取れた米を入れ、清市の本もリンゴ箱10杯分、随分重い引越であった。小学3年になったばかりの恭子が門を入る時、立派な大きな門だと思ったと言った。疎開先は余りにもみすばらしかった」（A-73頁）。

字引とは、1950年3月20日発行、『新基本英語辞典』大阪書籍出版、定価180円、清市の労作である。八重による「疎開以後会計」、1946年での購入品目と数字は以下である。生産手段の多さが際立つ。

1石140kg、闇米6斗（6000円）、薪500円（10貫×20円）、炭（400円・炭1俵80円）、鍋・ムシロ・農具（1000円）、被覆費・配給品（460円）、ゴム長靴（200円）、タバコ（配給・180円）、新聞（1ヶ月8円）、家賃1ヶ月（1ヶ月18円）、電灯（百円）、日備品（1000円）、交際費（200円） 合計14400円。

家族の戦時下の暮らしが完結した。

注

- 1 西川祐子『日記をつづるということ』（吉川弘文館、2009）、田中祐介編『日記文化から近代日本を問う』（笠間書院、2017）等参照。
- 2 長志珠絵・佐々木和子編『空襲下の神戸一日々の日記から一』（2021年度神戸大学地域連携報告書、神戸空襲を記録する会関係資料集4、2021）、野坂昭如『終戦日記を読む』（中公文庫、2020）からは集団的記憶形成に戦時下の戦災日記の寄与のあり方がよくわかる。
- 3 この一家の夫である「塩尻清市」は研究者としては中等教育機関に属しながら、アジア太平洋戦争下にあつて、労苦の多い翻訳出版を上辞し（アーネスト・サトウ『幕末維新回想記』日本評論社、1943）、占領期の1947年には芥川龍之介の『河童』を翻訳（秋田書店、1947年）、『TIMS』誌面にも取り上げられた。戦後は草創期生の京都女子大学で英文学の教授として業績を残し、研究者として生をまっとうした人物だが、東京での苦学生時代プロレタリア文学のカフェの場面の描きぶりに、自身の生活苦からくる違和感と嫌悪を抱いたという。1899年生まれ、明治の知識人青年として少なくはないとは

- いえ「苦学」を重ねた。詳細は塩尻清市「略歴」（『塩尻清市教授退任記念号・英文学論叢』14、1970年12月号に詳しい。
- 4 上記「略歴」によれば以後清市は、英語教員として府立三中6年、光華高等女学校3年、戦後直後の「浪人1年余」、京都府立高等女学校2年余を経て草創期の京都女子大学に着任、21年間つとめ教授職にあった。
- 5 「デパート」については大丸、高島屋が京都市内中心の商業地区の代表的な百貨店だが、京都駅北西、1931年創業でより庶民的な「丸物百貨店」の可能性も高いが、Bに固有名詞が登場するのは「大丸」のみである。
- 6 和田蒔・中川理「小売市場の普及に見る生活文化の近代の変容」（高木博志編『近代京都と文化―「伝統」の再構築』思文閣出版、2023）
- 7 「防空壕の屋根作り」（12.20）、「防空壕の屋根補強」（12.21）、なお京都市の建物疎開については川口智子『建物疎開と都市防空―「非戦災都市」京都の戦中・戦後』（京都大学出版会、2014）参照。
- 8 小林啓治『かくされた空襲と原爆』機関紙共同出版、1993等多数。最近では京都女子大学文学部史学科日本史演習坂口セミ『京都・馬町空襲被害地図』2018等参照。
- 9 紙幅の関係で別稿準備中

謝辞

本稿作成にあたっては、塩尻佳子様・塩尻恭子様には貴重な資料の閲覧をはじめ、さまざまな便宜をおはかりいただきました。記して感謝もうしあげます。